

0. 小児の特性

生下時	1か月	3か月	6か月	1才	2才	3才	6才
3kg	4kg	6kg	8kg	10kg	12kg	15kg	20kg

骨格がすべて石灰化していないため、骨折なしで臓器損傷がおこる
体重あたりの体表面積が大きいため低体温になりやすい

1. 小児心肺蘇生を必要とする疾患は？

80%は呼吸窮迫、20%は循環虚脱による

呼吸不全・呼吸停止に引き続く低酸素血症による2次的なものが多く、心停止前に呼吸停止に対する適切な処置が行われれば、予後が改善される。

小児期に蘇生の対象になる疾患は、外傷、窒息、中毒、突然死症候群、感染（髄膜炎、脳炎、重症肺炎）、溺水である。

2. 気道

まず見る→胸壁および腹壁の動きはあるか

次に聞く→聴診器で腋の下を聞きながら、こどもの口もしくは鼻の近くに顔を近づける

頬に空気の動きあり+聴診上も呼吸音あり→自発呼吸あり、気道閉塞なし

頬に空気の動きあり+聴診上呼吸音なし →自発呼吸あり、気道閉塞あり

頬に空気の動きなし →呼吸停止

ほとんどの気道閉塞は舌根の沈下による

→あごを持ち上げるか（脊髓損傷が疑われれば、下顎挙上）

それでも気道が開存しない場合エアウェイ（意識があれば経鼻エアウェイ、なければ経口エアウェイ）

3. 呼吸

バッグマスク換気

→①鼻と口を十分に覆う大きさのものを選ぶ

②1人は両手でマスクと下顎を持って、もう1人はバッグ換気をする

③空気の入り方は最初に気管の直上を聞いて、それから左右の腋下を聞く

4. 循環

外傷の後の血圧低下はボリューム不足

意識障害があれば脳血流の低下がある。

皮膚の色→まだら模様、もしくは青白い皮膚→初期のショック状態

5. 神経学的所見

最初に見ることは、

A=A l e r t 意識があるか

V=responds to Verbal stimuli 声をかけて反応するか

P=responds only to Painful stimuli 痛みに対して反応するか

U=Unresponsive

目の動き：

外側を見る→第6脳神経

下を見る →第4脳神経

それ以外の動き→第3脳神経

瞳孔の左右差がある場合→第3脳神経の圧迫（←脳ヘルニアの徴候）